

広報 もくれん



3

2002
March
No. 232

静岡県木材協同組合連合会
〒420-8601 静岡市港手町9番6号 県庁5階
TEL 054-252-3166 FAX 054-251-3463
e-mail: s-mokuren@mail.wbs.ne.jp
http://www2.wbs.ne.jp/~smokuren
横浜4-1-4 5000円 会費は公費に含む

遠嶺に向かいて老桜凛と立ち



それぞれの春

春吹きの春、今年の桜前線は、北上というよりスポット開花の様相で、4月初旬には華桜状態も予想されます。政令指定都市を目指し足掛け4年協議を重ねてきた静岡合併にも春一番。来春には人口70万人超、面積日本一の新都市の誕生となりそうです。

別れの春、本紙も本号をもって休刊。スタートの春、業務改革で新年度へ。台言葉は、公開協議と効率運営、広報活動も大きく変わります。

3月号のもくじ

- 特集** 地域懇談会その後
「改革は進んでいるか?」●……2~3
- すずむ木造化「浜津市立旭岡保育園」●……4
アコラ「木が好き」●……5
ウツティエンス・しずおか「次代の大学広報へ」●……6~7
お知らせ「木の家デザインコンクール入賞発表!」●……7
おが粉「剪定」●……8
静岡県着工新設住宅戸数「平成13年11~14年1月分」●……8
もくれんプラザ「読む・聴く・PR」●……9
行政の眼「そんなこんなを考えながら」●……10
編集室から●……11~12
PRのページ●……12

編集室から

お電話いただいたのは加藤俊助相談役。付松幸一相談役からは、「表紙と目次を付し一層読みやすく」と草創期にアドバイス。西谷嘉壽夫元金木連事務理事には、継続的な督励をいただき、平成三年三月、創刊10号の記念企画では、小澤善昭林野長官の訪問インタビューの橋渡しをお願いしました。

素人写真と俳句もどきの表紙にご意見をいただいたのは、天城の仲原秀次さん。「今月号の発刊はまさかかな?」と叱咤励ましたのは志太の金澤啓悟さん。「有料購読にしたら一体何人が読むかな?」とは御前崎の近藤貴司専務理事。掲載情報の質を問われた一言でした。もちろんこれ以外にも多くの皆様から貴重なご意見をいただきました。



▲昭和58年、学校内装木製の先駆けとなった静岡市立安西小学校

平成十一年七月、創刊二百号は、最初で最後のコート紙カラー印刷。本号の特集は、各種の行政統計を駆使し、星出昭相談役が「木材産地・静岡の過去、現在、未来」をテーマに取りまとめました。

■使命を終え、休刊します

そして、最終号の企画記事は、中島公盟専務理事による「改革は進んでいるか?」。この広報の改善、欄で記載のとおり、本紙は一応の使命を終え、今号をもって発刊休止となります。今後、時代に即した新しいスタイルで、会員との情報交流のバイブ作りを進めてまいります。

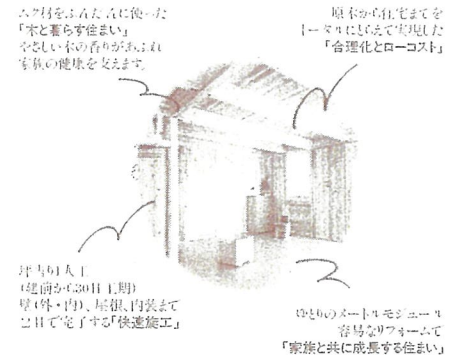
二十年間のご愛読、ありがとうございました。【編集室一同】

家族にやさしい木の家。 TERRA工法

中島公盟 木材技術センター 木造住宅合理化推進センター(第9期)認定

出雲大社に代表される古建築には、柱の間に羽目板を落として入れた「きりりほり」が使われてきました。TERRA工法は、その伝統工法を現代のニーズに合わせて改良した、21世紀型の住宅システムです。

人間が最も身近に感じる木材「木」を積極的に使い、内装材とすることで、木が持つ心地よさを充分に味わっていただける健康・快適住宅です。ホムアルティメットなどの古物資の心配がほとんどないことも、木材の魅力でホムアルティメットの「移の家」と北吹雪ホワイトウッド仕様の「フィンランドの家」があります。



「FFロケット工法」の
日東木材産業株式会社
〒434-0012 静岡県浜北市中瀬7698 TEL:053-588-7802 FAX:053-588-2814

取扱店募集 (地域限定)



2002 2004

静岡県木材業登録業者
静岡県木材協同組合連合会

登録業者への配布ステッカー

キャッチフレーズの主旨

住まい、学校、職場など、木を活かした生活環境を広げましょう。木を使うことは、地球環境の保全に貢献すること。人間の心と体の健康も育んでくれます。

新聞体制 常を疑いつつ

地域懇談会その後

改革は進ん

でいるか？

◆活動の支援

課題は焼却処理対策！

最も苦慮されていることは、端材(木屑)の代用としての焼却処理である。県木連としても、クリーンヒットはないのが実情である。しかし、安全レベルの確保をはじめ、コストダウンのための計測経費の低減化など、支援策にもがいている。

① 計測分析機関を絞って会員価格での斡旋をお知らせしたが、一年余が経過したことも踏まえ、第二弾に取り組み中である。

改革は小泉内閣の特許ではない。ここである「改革」は、静岡県木連の進捗状況です。

十三年度、「組合員のために」をモットーに、いくつかの企てを進めてきました。

まず、正副会長会議の濃密開催による課題処理。

次に、組合員のありのままの「意見」をより広く聴くため、昨年七月から九月にかけ延べ十五会場での地域懇談会を開催。

また、九名の単位木協代表による「改革委員会」を設置、主要課題の検討を依頼。

改革は、皆様の「ご理解」協力が進みます。これからを期

して主要なものをお知らせします。

◆木材利用のすすめ

3Kをキーワードに 知事に要請！

木材の活用は、3Kという。健康づくり、教育支援、そして環境づくりである。木材産業は、循環型社会形成の申し子で、不況と言いつつも、意義深い仕事と認じている。

① 地域懇談会の意見を基に県知事や関係部長に要請行動を行った。県官施設や土木工事における木材活用、また木造住宅建設促進への支援の提案。県森連との同道である。

これらを受け、県は昨年十二月五日、副知事をトップに総務、農林水産、教育など十四部局長による「木材需要拡大庁内会議」を設置したところである。二月二十六日には、公共部門の木材利用目標値を十一年度の二倍に定め、児童生徒の木製机導入など積極的な取り組みを進めつつあることは、新聞報道のとおり。

② 官民工事情報提供を新たな開始。会員の皆様の地元活動の参考にと考え、十二月以降毎月学校や大型建築情報をお知らせしている。詳細ご希望の向きは、本会迄ご連絡いただきたい。

③ パンフレット第十二弾「Wood Voice」木の家に住みたくなる本」を十二月に発売。県内はもちろん、全国でご利用いただき、増刷の嬉しい忙しさである。これらの取入は、県木連の大きな財源として業務推進の力となっており、今後も年一回を目途にメリハリのきいたパンフレット作成に努めたい。

④ 十四年度は、新たなPR活動として、改革委員会の提言をもとに、消費者を対象に「木材フォーラム」を計画している。

⑤ 県森連との連携を図っている。先の要請行動とともに、具体的には、十二月発足の「しずおか優良木材供給センター」設立を協働。十四年度から県は、木造住宅づくりに対し、利子補給制度予算を計

ステッカー配布、事務取り扱いの窓口は会員である地区木協となる。登録料は五千円、ただし、非組合員は木材PR推進費三万円の上積みとなっている。業界の再結集を図るため、新たな登録制度へのご支援ご協力をお願いしたい。

◆経費の節減

議論を尽くし、即実行！

「県木連は、会員である地区木協とその構成者である組合員のためにある」。定款の第一條にいう、このことを反復念頭に努めている。仕事は、効率的たるを要するし、業況を反映して会費をはじめとする経費は更に節約して生かすことが当然である。

① 本年度は正副会長会議を十五回開き、業務改善を進めている。規程類の見直しは、共催事業規程を簡素なスタイルに、職員就業規則は現代風による事務簡略化、そして慶

平規程は、直接功労のあった方を主体にするなど、現状に

上している。制度活用を皆様にお願いしたい。

◆広報の改善

もくれん休刊衣替え IT化へ！

IT化は、昨年のアンケートの結果(広報もくれんNo.二二六既報)にあるように、想像以上に進んでいる。この対応を急がなければならない。

① 県木連ホームページの拡充。消費者向け、会員向け別に、PR誌のスボット、木造建築の実例コーナーあるいは行事開催のお知らせなど、現在新たに、常々使える画面づくりを進めている。是非ご利用願いたい。

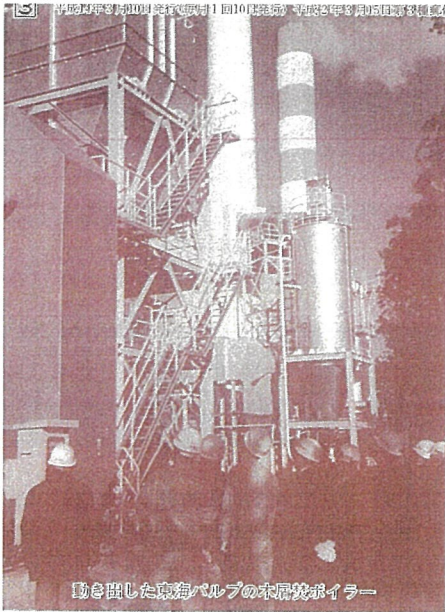
② 「広報もくれん」発刊休止。昭和五十七年来、通算二二二号で、皆様に情報をお届けしてきた。しかし、今日的に効率よく業務を進める上で、本号をもって休刊する。今後ともペーパーによる情報の必要性も考え、ファックスでも送信可能な「随時情報シート」に改めてゆきたい。

合わせて改正した。

② 理事会をはじめ会議は、互いに顔の見える円型、議事を尽くしていただくよう、資料を事前にお届けするなど、小さなことでも即実行に移している。

③ 改革委員会(影山弥太郎委員長)からは、主要検討項目の一つとして、会費減額を前年度二、八四〇万円から、十四年度は二、五〇〇万円にする提言を受けた。諸般を考慮し、それに沿った予算骨子を三月八日開催の第六回理事会でご審議いただいた。当然のことながら、例年に比べ、二カ月近く早く検討を進めたことになる。スローガンは、捨てる、創るであり、所要の手続きを踏んで実行してゆきたい。

いずれも、皆様の貴重なご意見を基に、知恵を絞って、努力中です。「木材は必ず使われる。使ってこそ3Kは実現される」と念じつつです。皆様のご理解、ご協力をよりよくお願いいたします。



動出した東海パルプの木屑ボイラー



左側が筆者

(沼津市)
一般建築士事務所アトリ工結
高島ゆかり

木が好き



誰しも樹齢何百年の太木を前にした時、その生命力に心攝さぶられることだろう。それが「材」になった時も、その力と魅力はあり続けると思う。

私の中で、印象深いのは、学生時代に行った民家調査である。その民家は、山間の過疎の村の中

新しい何かを

住宅の設計に当たって常に思うのは、その土地その場所、住まい手によって創り出す空間は違い、様々な条件を考慮して最適と思う工法を提案する。今までの生活や希望の形を調うのは勿論のこと新しい何か、新しい可能性を見出した。

材になっても

私は、住宅設計を主に、その大半が木造である。同じ木造でも材や工法は多種であり、其々に必ず長短所はあり、創り出される空間や機能や可能性も違う。いつもいつも、私自身が悩む点である。その中でも設計事務所として独立して三年、地域の木材を使うことを何処かでこだわってきた。以前、勤務していた車庫の設計事務所

カタログの言葉だけでは

現在の交通が発達し、産業として物流や商社が経済社会の一部を動かしている。住宅としてはハウスマーケットが住宅を商品化している。生き残りかけた工務店も、独自の工法やキャチフレーズを前面に押し出して売り込んでいる。その中で、私がこだわっているのは、施工をほしめ、施工者、各職人と建設的にとことん話し合い、お互いに納得のいくような「いえ」づくり

地域材にこだわらる

私が何よりも地域材にこだわりたい理由は、今まで受け継がれてきた「人の技術」である。志のある製材所の方は、厚木を見、適材適所に材を切り分ける。決して数値だけでは表現できない、生き物である木の個性を見極めた技術である。また、山が好きな山村家の方は、

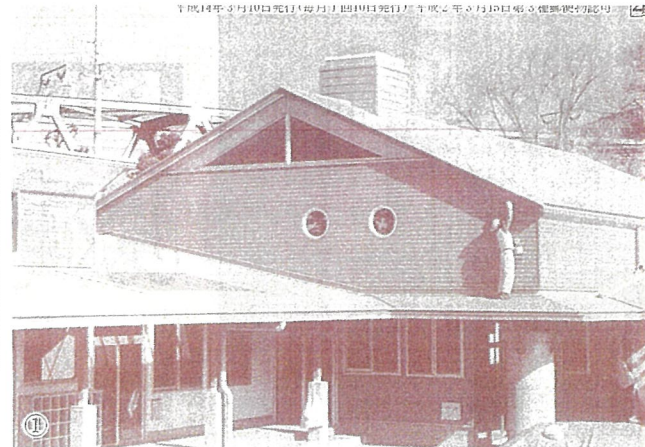
立ち木の状態で、その木が振れるか否かを見分けることができる。私は何度か同行したが、何処がポイントなのか、まったく解らない。まさに、プロの技術である。と同時に、これこそ大きな財産である。しかし、残念ながら、今はそのような人々は一握りであり、その志も金銭的なバランスで何処まで続けられるのか解らない。出来るだけ、近くの山の木を使いたいという、製材所に丁寧な乾燥を求めたり、使用用途に合わせた各部材の細かい要望を求めている、理解して頂くに至らない場合も多々ある。それは多分、他の産業からの利益の方が効率よいからであろう。勿論、仕事であるので利益を上げなくてはならないが、それと同時に、人には本来、創り出す喜びや良質的なもの、美的な向上の意識があると思う。

かつての民家は、そんな中からの結晶だとも思う。建物としてデザイン表現は、様々に異なっているが、お互いに理解し合い、其々の責任と自分の心を込め、創り出していく「いえ」は、その地域にも、その「いえ」にもその人一人一人にも大きな可能性を引き出してくれていると思っている。そんな「いえ」づくりがしたいと願っている。

施設の概要

- 所在地：焼津市駅北3-17 10ほか
- 構造・規模：木造(木大断面構造)平屋建て
- 建築(延床)面積：1,160.44(1,087.84)m²
乳児室2室、保育室4室、遊戯室、相談室、調理室、職員室、職員更衣室ほか
- 総工費：262,500千円
- 設計・監理：エー・アンド・エー総合設計(静岡市)
- 施工(建築)：近藤建設工業(株)(焼津市)

- 1丸太小屋を思わせるユニークな外観
- 2豊かな採光、大きな空間の遊戯室



すすむ木造化 No.114

ログハウス風の園舎

焼津市立旭町保育園

今回の木造化シリーズは、木造園舎の改築事例をご紹介します。

老朽化、定員増に向け

取材地は、焼津市内を流れる瀬戸川沿いの住宅地の一画。昭和四十七年に建設された同園は、これまでに三回の増築工事が実施されてきましたが、老朽化し、また定員増(九十名から一二〇名)をはかるため、今回の改築となりました。

工事は、少子化対策事業の一環として、隣接する旭町デピコ広場と同保育園敷地を交換し、さらに広場に隣接する水道用地の一部を取得して、建て替えの青写真が完成したものです。

健康的な木の温もりを

新園舎は周囲の環境との調和を考慮したログハウス風の木造平屋建てで、美しく夢のある生活環境づくり、「光と風を取り込み、安全で、木の温もりを感じる、健康的な保育環境の実現(同市建築住宅課)」という設計上のポイントが巧みに具現化されました。

施設は、〇歳児から五歳児の乳児室、保育室が六室配置され、ス

ロープの設置、段差の解消等のバリアフリー対策はもちろんのこと、壁材や床材には健康に配慮した資材が選択され、建具がアクセントになっているのも特色のひとつです。

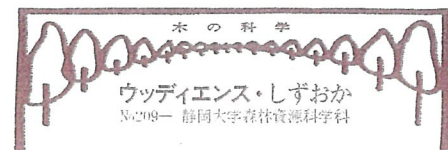
遊戯室、保育室等には大断面集成材により大きな保育空間が確保され、天窓からの採光等の立体構成や、通風、園児透視の平面構成など、随所に設計上の工夫が凝らされています。

立派な園舎ができたね

木質材料に目を向ければ、圧巻は外壁、内装の一部に施工されたスギ丸太風加工板(二五㎜厚)。そのほか内装ではスギ腰壁、床にはカバ複合フローリングが、構造材では遊戯室、保育室等の柱、登り梁のベイマツ通直集成材等、適材適所の資材選定となっている。

ひとつだけ残念なことは、施設利用上の理由から、デッキテラスにWPC(樹脂複合木材)が使用されたことだ。

「立派な園舎ができたねえ」と周辺住民が自慢する同園では、「三月下旬の卒園式、四月初旬の入園式が高草山を遠望する遊戯室で開催(同市児童課)」されることになっています。



次代の大学広報へ

開かれた大学として、違った形で皆様のお役に。

木質科学講座
教授 滝 欽二



昭和五十九年九月、広報もくれん第二号において、本シリーズの前身「林産学科の窓」が始まりました。トップバッターは、岡崎光林産学科教授(当時)でした。「産学共同の実をあげる端緒としての大学」という、いわゆる学科学報の役割を担う窓口として期待されました。

爾来、十九年間の長きにわたり続いてきた本シリーズですが、本号でのNo.209をもってひとまずお休みすることとなりました。

この間、中には雅拙であったり、あるいはわかりにくかったり、内容が微細すぎたような原稿などもあったかと思いますが、読者の皆さまには今日までお付き合いいただきまして、誠にありがとうございます。

この「林産学科の窓」を掲載しはじめた頃に第二回目の公開講座「住宅の中の木材の科学」を実施、このときの模様を寺谷文之教授が第二号で紹介しています。

その後回を重ね、本年八月にも「住まいと木材」講義と実験として公開講座を計画しております(別表参照)。県木連会員の皆様にもぜひご参加いただければと思います。

記念出版も

静岡大学林産学科は設立二十五周年で完全に名称が消え、森林資源科学科として新たな船出を迎えました。そこで、林産学科を記念して、それまで「広報もくれん」に綴ってきた原稿をまとめて出版することとし、通算八三号分をまとめ、県木連の骨折りで記念出版誌「ばあむくうへん83・それぞれの木の話」が発行されました。いまも読者の皆さまの本棚のどこか片隅に眠っているかもしれません。

高まる環境問題への関心

さて、第一六〇号(平成八年三月)では農学部再改組について紹介、森林資源科学

第三四号(平成六年一月号)では、二三年間静大に在職された寺谷先生から回顧録を頂きました。この一年程前より、筆者が編集担当となり、内容をいろいろ考え、苦慮した挙句、増加している外国からの留学生に原稿を依頼することになりました。

そしてルーマニアやイランからの留学生が、それぞれの国の森林・木材の情勢など、普段はなかなか情報が少ない母国の様子を紹介しています。

平成十年には(第一九一号)、パンフレティッシュの森林・木材事情を紹介しています。彼ら留学生は、帰国後、母国やアメリカ、カナダなどで森林木材関連の研究機関に勤務していることとす。

科の一部のスタッフが新設の人間環境科学科に移動しました。

この頃、大学農学部にも女子学生が増加、祖父江先生は「気力・能力充実の女子学生」ということで、今後は女子の社会進出、就職増加に対応することが重要であることを予想しています。

また、世間の環境に関する見方が変わり、自然との共生とか共存などの言葉とともに、森林資源、木材のリサイクル

などについて注目を浴びるようになってきました。これらのことは現在も続いており、住宅のなかの環境問題としてシッタハウス、VOC(揮発性有機化合物)さらには化学物質過敏症などが新聞を賑わすようになってきました。

一方、この間大学のスタッフも入れ替わり、名波直道、山田雅章、平井浩文、渡辺敏氏等が赴任し、学科の中も少し若返ってきました。

本欄の中身も少しずつ変わ

り、諸外国への出張、国際学会やシンポジウムへの参加の様子など実際に見聞したこと

も時折掲載しています。台湾、中国、インドネシア、ドイツ、フィンランド、カナダ、アメリカ、オーストラリアなどの訪問記で、これらの中には若い博士課程の学生の寄稿もありました。博士課程の学生には本人の行っている研究の紹介もお願いしました。

今回で通算二〇九回となる「ウッドサイエンス・しずおか」は、木材、木質材料、木質構造、居住性、バイオマテリアル、紙パルプ、抽出成分、腐朽菌はたまた環境ホルモン、水や学校教育の問題などについて専門集団が、毎回頭をひねって綴ってまいりました。

今後とも開かれた大学として、これまでとはまた違った形で、

少しでも皆さまのお役に立てるよう努力してまいりますので、大学のホームページなり各スタッフの電子メールアドレス(本年一月号参照)などを通じて何なりとご相談下さい。もちろん直接大学にお出かけ頂ければ幸いです。スタッフ一同お待ち申し上げております。

最後に、皆さまのますますのご健勝をお祈りしてペンを降ろします。長い間どうもありがとうございました。



平成3年発行の「ばあむくうへん83・それぞれの木の話」

静岡大学公開講座のご案内 住まいと木材—講義と実験

最近のわが国の木材・住宅に関する動向や材料の解説および木材強度試験、耐震性木構造試験、ホルムアルデヒド測定試験などを交えた講義と実験を計画しています。多くの会員の皆様のご参加をお待ちしております。

1. と き：平成14年8月27日(水)～28日(木)
9:00～17:00
2. ところ：静岡市大谷「静岡大学農学部」
3. 対象：木材企業・住宅工務店技術者
4. 定員：40名
5. 参加費：6,800円
6. 講師：静岡大学農学部、教育学部ほか
7. お申し込み＆お問い合わせ：

森林資源科学科・滝 欽二教授
TEL&FAX. 054-238-4860

「木の家デザインコンクール」入賞者発表!



天竜川すまいのネットワーク(伊藤晴康会長)では、静岡県産材を使用した住宅を対象に標記コンクールを開催、設計者自慢の木の住まい62点が出品されました。厳正なる審査の結果、豊かな住空間を創出した住宅7点が入賞、去る2月23日、浜松市において表彰式が開催されました。

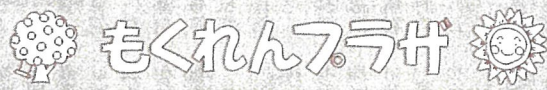
読む 夢のわが家で泣かないために

建築ジャーナル 編
本体2,600円

本書は、建築紛争を避ける教訓集ともいうべきもの。取り上げた事例は、シックハウス、地盤沈下、構造欠陥、雨漏り、クラックなどの被害調査から裁判事例まで100件。調査の依頼内容、依頼までの経緯、建築士の診断やアドバイスがわかりやすくまとめられています。

建築基準法改正や住宅品質確保促進法の制定によって、欠陥住宅づくりに関わった建築士や施工会社だけでなく、材料供給者の責任を問う動きも広がっています。

建築紛争に巻き込まれないためにも、是非ご一読ください。



◆ 軒旋価格 3,000円
◆ お申し込み 県木連まで

PR うるおいの生活環境提案！ 「木と暮らすフェスティバル」 2002横浜



幹旋 プロモーション活動に



大多喜町立老川小学校 (千葉県)

木材利用推進中央協議会では、「写真と図面で見る『木』の施設・その16」を発行、今回は、RC造の小学校の内装を全面的に木質化した事例をはじめ、学校、保育園、事務所、体育館、住宅団地から木製暖房・棧橋等のエクステリア事例まで、幅広く紹介しています。行政、設計事務所、工務店などへのプロモーションに、是非ご活用下さい。

全木連では、昨年に引き続き「地域材需要開発促進事業」の一環として、2月から3月にかけて、名古屋、横浜、大阪の3会場において、標記フェスティバルを開催しました。

本会は、組合員の協力を得て、3月2日(日)～3日(月)に開催された横浜会場に出展、木材PRに努めました。

今回は、住まいだけでなく、学校、職場などに地域材を活用した生活環境を広げるため、「ふじのくに」の豊かな自然が育んだスギやヒノキの無垢材でつくる、うるおいと和らぎの生活環境を提案しました。

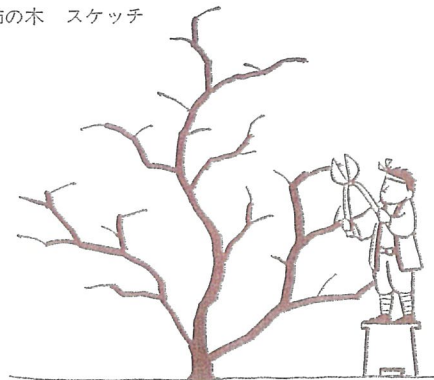
◆主な展示内容

- ① スギ、ヒノキでつくる柱、梁の「プレカット軸組み構造モデル」の展示
- ② 表面熱加工したスギの床、壁の内装仕上りによる「書斎」の展示
- ③ 特殊モルダ加工したヒノキの壁、杉の床仕上りによる「子供部屋」の展示
- ④ ヒノキの学童机・椅子、テーブルカウンター、保育家具、カタログ展示台、事務機の展示

◆展示協力

天竜ウッドヴィレッジ、協業組合ジャパンウッド、天竜市森林組合、天竜プレカット事業協

柿の木 スケッチ



剪定

実をつけさせる

春先の今、周智や引佐一帯の風物に教わる。剪定を受けた柿の樹型が見事である。太い幹が、前後左右に分かれて立ち上がる。幹の中段や先端から一つ一つの枝が、空間を分けるように水平に広がる。淡い緑の新葉風景を想像するとまた楽しい。

「剪定」という言葉は、日常あまり使わないが、農業や造園の専門用語である。果樹の成長や結実について、栽培上部台のようように、枝を切ったり一定の樹型に仕立てる作業である。刈り込みともいう。

樹の形は、果樹の種類と性質によって異なる四つ。その一つに、柿やみかんの方式があるという。毎年主な幹に数本の主枝をつくらせながら、一三三メートル程になったら心をためて、それまで育てた主枝を太くし、実をつけさせる方法をとるとい

取捨選択

「剪定」は、仕事や事業を育て成果をあげることに通ずると

思う。事業はもと時代背景をもつてスタートする。目的を認識し、その実現のためAあるいはBという柱を樹てる。それに直結する業務が進められる。時とともに技術が進み、社会が変われば、業務もそれに応じなければならぬ。

どれを捨て、どれを伸ばし、時々必要達成のため、取捨選択しなければならぬ。誰も、このことはわかってる。

柿の剪定は、果物をつけるため、毎年実行される。目で見てわかる範例である。業務に応用したい。

仕事の剪定は難しいとも考えますが、さにあらず。以前からある仕事を守ろうとすることがネックである。時に応じて削った業務も当然切る時がある。切ることができないのは、次の芽を見定められないからだ。新しい芽は必ずある。

柿の剪定を見るとそのことを教わる。「剪」の字は「進める」意味もある。組合員のため、赤い実がつくように業務の剪定を続けなければならない。

平成13年11月～14年1月分 静岡県着工新設住宅戸数

(単位:戸)

市町村名	11月	12月	1月	市町村名	11月	12月	1月
静岡市	253	304	540	藤枝市	85	65	67
岡崎市	544	547	506	御殿場市	18	131	51
浜松市	136	118	94	袋井市	87	101	109
清水市	164	110	127	天竜市	8	5	6
熱海市	8	17	7	浜北市	113	70	37
三島市	112	72	186	下田市	9	15	6
富士宮市	78	90	80	裾野市	50	70	17
伊東市	80	45	38	湖西市	59	35	20
島田市	54	61	20	賀茂郡	21	12	20
富士市	237	204	163	田方郡	107	80	57
磐田市	66	53	51	駿東郡	53	134	95
焼津市	116	112	90	富土郡	9	4	1
掛川市	73	174	62	庵原郡	18	23	10
志太郡	25	11	8	市計	2,944	3,014	2,694
榛原郡	99	96	89	市計	2,350	2,399	2,277
小笠原郡	113	104	50	市計	594	615	417
周智郡	27	8	10	東部計	918	992	815
磐田郡	58	56	44	中部計	814	782	951
浜名郡	29	31	13	西部計	1,212	1,240	928
引佐郡	35	56	20				



そんなこんなを考えながら



静岡県農林水産部林業統括監 関沢 恵

【被害は将来の世代に】

皆様には大変お世話になっております。本欄をお借りして厚く御礼申し上げます。

驚異的な国民の支持をバックに、構造改革を掲げた小泉内閣が発足して十カ月、残念ながら景気は良くなると言うより悪化の気配すら懸念される今日、一日も早い回復を願わずにはいられません。

さて、地球温暖化防止に係る京都議定書については、批准の方向で小泉首相の所信表明を受け、批准・発効に向けて動き出しました。失業率が増大している中で、温暖化対策は企業の国際競争力への影響を及ぼし、国民に更なる痛みを強いることにも繋がる懸念

しい課題でもあります。しかしながら、日本が議定書を批准して誠実に温暖化ガスの排出削減に努めるべきであるとのことについては、議論の余地は無いと思われまふ。

温暖化は、被害を受けるのが将来の世代であることを強く認識する必要があります。特に、化石燃料に依存する経済構造を抜本的に改めない限り展望は開けないと考えられます。

そうした流れの中にあつて、循環型社会の構築は、二一世紀における地球規模での必要かつ喫緊の課題と言つても過言ではないでしょう。

【夢・夢・夢】

そんなこんなを考えながら

んな夢を見ていました。

夢①その①

孫の通う小学校の校舎が木造で改築された。床も腰張も机もみんな木だ。素晴らしい環境。子供達の生き生きとした表情が全てを物語っているようだ。

聞けば文部科学省は、京都議定書批准による地球温暖化対策として、小中学校の校舎を、順次木造に改築していくことにしたそうだ。

夢②その②

友人を見舞った某総合病院の内装には木竹がふんだんに使われていた。病室に入るとほのかな木の香が安らぎを誘う。居心地が良いと笑顔で語る友人。羨ましい??

厚生労働省の温暖化対策事業を活用したような、ムムなかなかやるな...

夢③その③

二〇〇六年夏。待望の家族揃つての海外旅行。空港のロビーは木であふれていた。カウンターも間伐材で出来ている。そういえばフルウエーのすのこ空港を利用した友人が木に囲まれた雰囲気感激したと

言っていた。ここは、間違したとたん木に包まれた空港との評判から国の内外から視察者が殺到しているそうである。これも国土交通省の木質化推進特別事業に採択されたそうだ。どこまで!勿論静岡空港さね。

こんな夢が叶つたらどんなに素晴らしいことだろう。ウーム!可能性があるなら是非長生きをして見て見たいものだ。

節制、節制?駄文にお付き合ひ頂き申し訳ありませんでした。

【県の組織改正】

県では、平成十四年度から森林・林業関係組織(本庁のみ)が次のようになります。

「環境森林部」(森林総室)「六室」ただし、工事検査部門は、農業水産部に残ります。

生活環境、大まか言えば地球規模での環境保全にとつて欠かすことの出来ない森林。その森林を豊かに育てるためには林業、木材産業抜きには考えられません。また、(〇)を固定(野営)する木材を活用することが循環型社会の構築に繋がることなどから、環境の視点に立ち、県民共通の財産で

ある森林を県民全体で支えていく組織に再編したものです。

皆様の御理解と御協力をいただきながら、今後とも森林、林業、木材産業の一層の推進に努めて参りたいと考えています。今後ともよろしく御願ひ申し上げます。

【歴史そのもの】

バックナンバーも二二三を数え、二十年にわたり、静岡県における木材産業界の貴重な情報広報源として大きな役割を果たしてきた「広報もくれん」が、今回の発刊をもって休刊すること。大変な驚きと惜別の念を禁じ得ません。

木材価格のピークであった時代に産声を上げた「広報もくれん」の歴史は、その後の静岡県の木材産業界の歴史そのものであったように思います。

初刊以来、猛烈なスピードで変化を遂げた社会環境の中、木材産業界のみならず内外に果たしてきた情報発信の功績は、誠に多大であったと心より敬意を表する次第です。

またの再刊を夢見て、ありがとうございます。



足掛け二十年の足跡は

広報もくれん第二二三号をお届けします。振り返れば、昭和五七年の全県木材PR事業の開始を契機に、それまでの団体報「県木連だより」を刷新し、新たに県木連と会員事業主を結ぶホットラインとして「情報キャッチボール」



昭和五八年、林業本村、建築業界から二千余名が参加した街頭PR

を台言葉に復刊しました。

故川口清俊会長、故高橋孝三会長、牧野平四郎前会長、新聞薄二現会長と四代にわたり、足掛け二十年継続発刊してきたこれまでの紙面を繰れば、本県木材業界の様々な横顔が浮き彫りになってきます。

【再編整備、木の日】

「もくれん」復刊の五七年秋、木材PR専門小委員会統括のもと、テレビ、ラジオ、新聞等のマスメディアを活用した木材PRがスタートしました。これに呼応するかのよう、単位木協でも独自にPRチラシやDMの作成等、様々な受け皿整備が検討されました。その一環として、県木連主催の「住宅相談員育成研修会」を県下各地で開催したのもこの頃でした。

同時に、利子補給方式による過剰生産設備の廃棄事業が開始され、本県では再編整備、拠点整備、体質強化と続く一連の補助事業で五十を超える製材工場等が設備廃棄、生産方式の合理化、事業体の集積

を行いました。

十月八日「木の日」催事は、五七年の静岡地区の林業・木材・建築三業界合同の決起大会が契機でした。

その翌年には県大会が開催され、その後、市民参加型の恒例イベント「もくもくまつり」へとつながりました。なかでも、昭和天皇崩御により、秋の恒例事業が年度末まで繰り延べされた六三年度静岡会場場の舞台裏のイライラは、いまでも記憶に残っています。

【マウス実験と開発事業】

PRを契機に、単位木協独自の対応が始まったのもこの後でした。昭和六十年には、産官学による清水地域木村技術開発振興会の発足、静岡木協「木を科学する夜間講座」の連続開催、六二年には「木村展示情報センター」が沼津に設置されました。

県木連では会員のPR事業を後方から支援するため、企画運営委員会(杉山修一委員長)の提言により、六一、六二の両年度「マウス実験」を

静岡大学に研究委託しました。この実験結果が、様々な分野で木材PRのデータベースとして活用され、今日に至っていることはご存知のとおりです。

マウス実験と併行して実施したのが、本紙六七頁のウッドデザインスبزおかにも掲載されている新製品開発事業でした。「産官学」体制で、計六年間継続実施され、難燃三級内装材、六十分耐火木製ドア、土塗り壁同等外壁材など数多くの技術開発の成果は住宅展等で公表し、あわせて県下のモデル木造施設にも実際に採用されました。

【あのころが大きな転機に】

行政の動き、法改正等をめぐる掲載記事に目を転ずると、林産物の輸入関税の撤廃に絡み「活力回復五ヶ年計画」が取りまとめられ、この一環として文部省局長通達により「木造校舎の補助単価が七割増」となり、公共施設木造化運動に弾みがつきました。

業界一丸となって取り組ん

だのは、昭和六一年以降の売上税、消費税対策でした。円滑転嫁をめぐり、各地区の夜間説明会、勉強会は熱気を帯びたものとなりました。

しかし、何よりも印象に残っているのは、平成七年の阪神大震災被災地の現地踏査です。今紙面を読み返しても、鮮明に惨状が脳に浮かぶほど、その衝撃は強烈なものでした。その後、震災を機に性能本位に建築基準法が改正され、加えて木材乾燥を強く求める品確法が施行され、木材業界は長いトンネルに入ったわけです。今思えば、震災は大きな転機の序章でした。

そしていま、環境規制にともなう焼却処理問題が大きな業界課題となっており、今後この対応に努めてゆきます。

【意見番に感謝、感謝】

毎月発行する「もくれん」に対し、「ご意見をいただく」とは編集者の大きな励みとなります。そこで、いま印象に残っている事柄を思いつくままに列挙すれば、折に触れ、